

電卓戦争

部門内での企業間競争による
労働生産性の上昇

クレジット

『電子立国日本の自叙伝』，
「第3巻 電卓戦争」
(NHKソフトウェア)

▶ 本も出ています。——『電子立国日本の自叙伝』，
全7巻，相田洋著，NHK出版（NHKライブラ
リー）

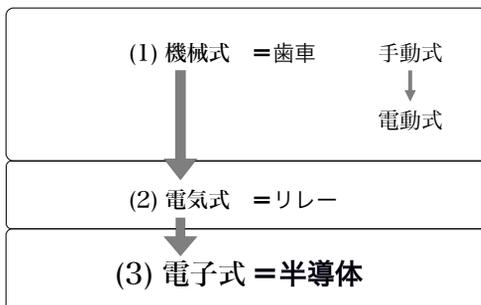
注目点

- ➡ 品質競争と価格競争
- ➡ 生産手段のイノベーションと
消費手段のイノベーション
- ➡ イノベーションの連続
- ➡ 競争と独占

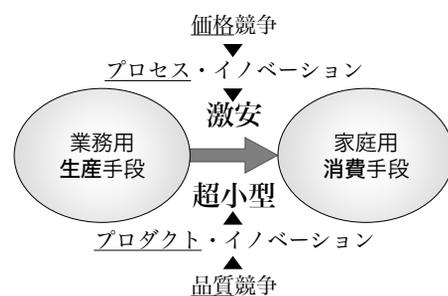
電卓とコンピュータ

電卓 (Calculator)	コンピュータ (Computer)
数値演算，しかも 四則演算が中心	汎用
ベンダがプログラムを 提供する	ユーザがプログラムを 自由に組める
ソフトを取り替えられない	ソフトを取り替えられる

電卓の前史



電卓の変遷



主要な参入企業

電卓市場

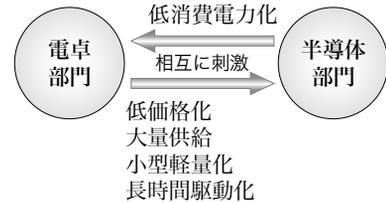
- Sharp (早川電機工業)
- カシオ計算機 (樫尾製作所)
 - 以上の二社が最後まで残り、寡占を形成
- ビジコン(日本計算機)
 - 画期的な商品をいくつも開発したが、あえなく倒産
- ❖ その他有象無象

半導体市場

- TI
- Rockwell
- Intel
 - 以上、最初はアメリカ
 - やがて、多数の日本の電機メーカーが参入

技術革新の誘発

電卓 (=完成品) 部門と、半導体チップ (=原料) 部門とが、たがいに生産性の向上の呼び水となった。



最初に目に付くのは品質の向上

- ボディ
 - 軽量化
 - 薄型化
- 性能
 - 高速化
 - 大容量化
 - 長時間駆動化

結局は市場価値の低下

- 最初は品質向上と手をつないで
 - 品質競争が主
- やがて品質向上が頭打ちになると、決定的要因に
 - 価格競争が主

- ▼ 1964年：53万5000円
 - CS10A (Sharp)
- ▼ 1969年：9万8000円
 - QT-8D (Sharp)
- ▼ 1972年：1万2800円
 - カシオミニ (カシオ)
- ❖ いまや100円ショップ

部門内競争の帰結

